



東日本大震災と安全・安心：高台移転論をめぐって

その他のタイトル	Safety and Reassurance after The Great East Japan Earthquake
著者	西村 弘
雑誌名	社会安全学研究 = Safety science review
巻	2
ページ	16-17
発行年	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018539

東日本大震災と安全・安心

— 高台移転論をめぐって —

Safety and Reassurance after The Great East Japan Earthquake

関西大学 社会安全学部

西村 弘

Faculty of Safety Science, Kansai University

Hiroshi NISHIMURA

被災地に立つと、津波の凄まじさをまざまざと感じた。この猛威をあまさず伝えるのは映像でも無理だ。写真やテレビをさんざん見てきたのに、打ちのめされてしまった。広島・長崎の爆心地もかくやと思わせる光景が360°に存在する。しかも、「点」としてではなく、「線」のつながりを持ち、「面」として広がる惨状であった。嘆息を繰り返し、ついには声も出なくなった。

災害被害は貧富の格差と無縁ではない、とよく言われる。塀をめぐらした頑丈な家は、洪水や地震によく耐える。しかし今回の災害は、人間が作ったちやちな格差などものともせず、「被害の平等」を貫徹したかのように見える。津波は4階に達し、ビルさえ横倒しにした。

けれども、その津波ですら克服できなかった「格差」が、高さである。根こそぎ持って行かれた集落で、ポツンと一軒、高台の家だけが取り残されていた。延々と続く破壊住居の連なりが、道路を少し上るととぎれた。そうした例を多く目にする、「次は、高台に住みたい」と被災者が思うのも、当然だと感じる。

しかし、それはけっして簡単ではない。土地がない、「足」がない、コミュニティがない、そ

れに何より先立つものとこれからの生活を支える仕事がない。それでも高台移転の可能性は保障したいものだと思う。移転案はそれらの懸念を払拭する施策とともに提示されるべきであろう。

その上で言うことだが、移転はあくまで強制されるものではなく、自主的に選択できるものであってほしい。移転にともなう種々の障害が取り除かれたとしても、なお、元のところに住みたいと願う人もいると思うからだ。元の土地には長年の愛着があり、人との繋がりがあり、仕事がある。そして何より、そこから再び立ち上がろうと希望を持つ人々がいる。復興案は、そうした地元住民の心情に沿いつつ立てることが求められている。

移転問題は住居だけではない。沿岸部にあって激甚な被害を蒙った鉄道についても、同様な問題がある。もともと津波を想定してトンネル部が多いルートで作られた三陸鉄道は、現路線で2014年4月までの全線復旧を表明した。三次補正が成立し、心配された資金面の目処もついた。だが、山田線や大船渡線など7路線を運休中のJR東日本は、一部を除いて何時までに復旧という計画を出していない。これは必ずしも

JRが怠慢だからではない。中心市街地や行政機関の移転が検討されており、鉄道復旧には「まちづくりとの連携が必要」と考えているためだ。しかしこれには、「まずは元通りに戻すことが重要」とする批判もある。鉄道が復旧すれば、「そこから人の流れ、物や情報の流れが生まれ」るからである¹⁾。たしかに一理ある。だが、かりに現在ルートで復旧しても、そこには住まないと決定されればなんにもならない。また、鉄道が復旧すれば駅には人が集まり町もできるだろうが、住民がどこに住みたいという意志決定をしないままの後追いの町づくりとなる。それで良いのかという疑問も生じよう。

国土交通省は各線区で復興調整会議を開き、自治体の復興計画との整合を図っている。その結果、石巻線と仙石線で運休中の一部区間が11年度内に、八戸線が12年度初めに、現ルートで運行再開となった。残る線区でも迅速な調整が望まれる。

会議では一部移転を含んだ案も検討されている。移転は良いとして、そうなれば用地買収や諸工事などで相当の費用と時間が見込まれる。費用もさることながら、年月がかかればしびれを切らした住民たちの流出が懸念される。2年とされている仮設住宅入居期間内に、何とか目算が立たないものかと、切に思う。

震災後、「苛政は虎よりも猛なり」という中国故事をしばしば思い出した。三陸地方は何度も津波の被害を蒙ってきた。その都度、高台への移転が提唱され、一部は実現したものの、多くは元に戻っている。津波はもとより恐ろしい、しかし、諸事情もまた考慮しなければならない

のがこの世である。虎と比べて苛政が怖いとなれば、虎の脅威と被害に耐えねばならない。それは昔と今とで変わらない。「虎」が自然災害に、「苛政」が社会的諸事情になっただけで、津波に怯えて暮らすか、生活上の諸負担を堪え忍ぶかという二者択一を迫られている。

命の危険を顧みないなど、ありえないと思われるかもしれないが、それはけっしてそうではない。そもそも「生きる」とは、なにほどか命を賭けて行う行為である。日々の外出や食事、呼吸ですら絶対の安全があるわけではない。さらに我々は、価値ありと認める目的に対しては、より積極的に命を賭ける。その目的成就を願うからこそ安全を意識するのであって、安全のために生きる目的の一切を放棄するのではない。

高台への移転案は安全を考えてのことであるが、諸事情はそれを許さないかもしれない。また、あえて元の土地を選択するかもしれない。「移転する・しない」が、各々の利害得失を十分考えてのものであり、また、移転しない場合には津波への備えを忘れないというなら、その意志は尊重すべきである。ただしその際、安全は現実には「安分」でしかなく、許容せざるえない害を含んでいることを直視せねばならない²⁾。それが辛いからといって、根拠の定かでない「安心」で蔽われようとしてはならないというのが、今回の震災の苦い教訓であろう。

注

- 1) 原武史(2011). 震災と鉄道 朝日新聞出版 p.60.
- 2) 辛島恵美子(1986). 安全学索隠 八千代出版 p.317.